

保育者養成課程における演習科目の意義

—児童文化財伝達における保育スキルの向上を目指して—

Significance of Practice Subjects in the Childcare Worker Training Course

花房ナオミ

Naomi Hanafusa

本研究では、保育専攻学生が保育者養成課程において、演習科目で学んだ保育スキルを実習で実施できたか、また演習科目を通してどのような専門性を身に着けたか意識調査することを目的とする。

演習科目の授業は、実践体験をもって行われることが多く、実習前の模擬保育として学生同士が子どもと保育者の役割を担って体験を共にする授業体系がひとつの特徴である。模擬保育の経験後に実習に取り組む学生は、演習科目の実践体験を実習先の幼稚園、保育園、施設で活用できているか。また保育スキルであるわらべうたや絵本の読み聞かせ、素話やパネルシアター等、その実践を通してどのような専門性が身についたと感じられたかを明らかにしたい。

アンケート調査の結果と事後指導の振り返りの面談より、実習でこれらの保育スキルを活用し、自信を持つ経験も確認でき演習科目において意義があったと考えられる。しかし学内で発表したのみで実習での実施には至らなかった学生も多く授業改善も必要である。

キーワード：演習科目 児童文化財 保育スキル 実習 保育者の専門性

I. 問題と目的

平成 29 年『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』が公示され翌年 4 月より適応された。特に『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の改定は、乳児期の内容が乳児と 1 歳以上 3 歳未満児と分けられ、より細やかな記述がみられる。同時に、保育所保育、幼保連携型認定こども園における「幼児期の教育」の積極的な位置づけや職員の資質・専門性の向上が挙げられている。

筆者の勤務校であった短期大学での授業担当は、「乳児保育」（当時乳児保育Ⅰ，Ⅱ共に演習科目）「保育内容言葉」「お話の世界」であり、乳児期から幼児期に至るまでの言葉の獲得や心身の発達を担う保育者の関わりについて触れる機会が多かった。

「乳児保育」では、乳児が言葉を身に付けていく発達段階と、子どもが語りたくなるような保育者の存在や環境構成の重要性を、「保育内容言葉」では発達段階に応じた保育者の関わりと児童文化財について、また「お話の世界」では視覚教材を用いた物語の伝達方法について作品づくりと表現法の学びを中心に進めてきた。

物語を伝える保育者の役割については、言葉の獲得に関する領域「言葉」の中に、「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる」とある。また、「こどもが絵本を見たり、物語を聞いたりして楽しみ、言葉の楽しさや美しさに気付いたり、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いなどを保育士等や友達と共有したりすることが大切である」とある。ⁱ

保育専攻学生に良い絵本を知ってほしいという思いから、授業の中で可能な限り絵本の読み聞かせを行っている。大半の学生は絵本を積極的に見て、物語を楽しもうとする姿勢を持っている。しかし、伊勢、吉村ⁱⁱが「保育者にとっての絵本体験の重要性Ⅱ」の中でも指摘するように、家庭での絵本環境はさまざまであり、絵本について触れる機会がない学生も増えている。ロングセラーといわれる絵本や、いわゆる「よい絵本」について知らない学生が年々増えている状況も否めず、特に保育専攻学生には絵本について基本的な知識を深めてほしいという願いがある。

保育専攻学生について長谷部ⁱⁱⁱは、保育者の専門性や資質能力向上に対する問題が以前よりも目立つようになってきており、旧来の保育者養成教育のあり方に再検討が迫られている、としている。また、保育者の資質や専門性において、筆者はこれまで「保育専攻学生が考える保育者の専門性について2」（2014 日本保育学会第 67 回発表 谷口ナオミ/松下京）^{iv}より、学生が実習場面でとらえる保育者の資質や専門性について調査を行ってきた。そこには専門性について「絵本や物語の知識があるだけではなく、その場の雰囲気を作る場づくりや、どのような状態の子どもでも快く受け止める人間性に着目している」ことを確認した。

そこで子どもに物語を伝授するスキルやコミュニケーションスキルを演習科目で身に着けるため「乳児保育」においてはわらべうたと絵本について、「保育内容言葉」においては素話、「お話の世界」ではパネルシアターの実践を授業内容にとりいれ、学生による模擬保育を授業内で実施した。

演習科目の中で実践的な活動を取り入れることは実習への準備の一つとなり、学生同士、絵本を読み合うことで、知らなかった絵本や物語を知るきっかけともなる。実習前の学生が演習科目において、体験的な学びの機会をもつことによって、実習に対する不安を少しでも軽減させ、保育者の資質や専門性である場づくりや子どもを受け止める人間性のあり方について触れる機会としたいと考え、以下のカリキュラムで授業を行った。太字部分が素話、絵本読み聞かせ、わらべうた、パネルシアターに関する授業である。乳児保育Ⅰはここに取り上げた保育スキルに関連する授業がないため割愛する。

保育内容「言葉」

第 1 回	オリエンテーション
第 2 回	保育内容言葉の意義
第 3 回	領域言葉の変遷
第 4 回	子どもの言葉の発達過程 言葉の芽生え
第 5 回	言葉を育む環境構成と援助 (1) 話したい、聞きたい意欲を育む援助
第 6 回	言葉を育む環境構成と援助 (2) 生活に必要な言葉の習得
第 7 回	言葉を育む環境構成と援助 (3) 伝える楽しさを味わう
第 8 回	言葉でのかかわりに配慮を必要とする子供への指導
第 9 回	保育者の言葉
第 10 回	「言葉」指導計画 言葉を豊かにする環境構成と援助 (1) ペープサート
第 11 回	言葉を豊かにする環境構成と援助 (2) 新聞紙シアター
第 12 回	言葉を豊かにする環境構成と援助 (3) 紙皿シアター
第 13 回	言葉を豊かにする実践：言葉遊び 保育の中での生かし方を学ぶ
第 14 回	素話の実践 (1)
第 15 回	素話の実践 (2)

乳児保育Ⅱ

第 1 回	乳児の栄養 母乳と人工乳
第 2 回	乳児の食行動の理解①嚥下機能について DVD 視聴
第 3 回	乳児の食行動の理解②嚥下機能の発達
第 4 回	赤ちゃんといっしょ①乳児といっしょ
第 5 回	赤ちゃんといっしょ②乳児といっしょ
第 6 回	集団生活におけるリスクマネジメント
第 7 回	保護者への連絡 連絡帳・手紙
第 8 回	三歳児神話について①
第 9 回	三歳児神話について②
第 10 回	乳児の文化財①乳児絵本について
第 11 回	乳児の文化財②いい絵本の選び方
第 12 回	乳児の文化財③絵本の読み方 模擬保育
第 13 回	デイリープログラム
第 14 回	指導計画
第 15 回	理解度チェック

お話の世界

第 1 回	オリエンテーションお話の技法について (パネルシアター、エプロンシアター、ペープサート、手袋シアターの紹介)
第 2 回	お話選び
第 3 回 ～13 回	パネルシアター制作
第 14 回	パネルシアターの発表①
第 15 回	パネルシアターの発表②

授業は 1 学年後期に「保育内容言葉」、2 学年前期に「お話の世界」「乳児保育Ⅱ」が行われる。短期大学であるため実習期間の設定はかなりタイトになっており、幼稚園実習の見学は 1 学年の夏季休暇中、3 週間の幼稚園実習は 2 学年の 6 月、保育実習Ⅰは 8 月、保育実習Ⅱ（保育所）は 9 月に行われ、保育実習Ⅲ（施設）は 2 学年の 1 月に実施する。

Ⅱ. 調査の概要

設問は、いっしょ、素話、絵本の読み聞かせ、パネルシアターを実際に行った実習について、またこれらの技能がどのような保育者の専門性につながったと考えるか、という URL を使用したアンケートで 100%の回答率であった。

補足として、保育実習Ⅲ実習事後指導で面談を行った 11 名に口頭で質問を行ったものも付け加える。口頭質問は面談時に、アンケートのみに使用することを伝え、録音することの許可を取っている。学生とした会話を逐語録にしてそのまま引用している。

Ⅲ. 方法

1. 実施方法 学生の学校メールにURLを送り実施 <https://questant.jp/q/GK0GI6UV>
2. 実施期間 2019年1月8日～1月28日
3. 対象 M短期大学 幼児教育保育学科 2回生 92名

Ⅳ. 調査の結果

- ① 実際に実習で行った実践の結果 92名中、以下の通りである。※複数選択

幼稚園実習

素話 4人 絵本 86人 わらべうた 13人 パネルシアター 20人

保育実習Ⅰ・Ⅱ

素話 4人 絵本 86人 わらべうた 43人 パネルシアター 18人

施設実習

素話 8人 絵本 60人 わらべうた 27人 パネルシアター 5人

1. 素話の発表・実習での実践について

調査の結果、素話を実習で実施した学生は幼稚園実習、保育所実習で共に 92人中、4.3%で4名、施設実習で8.7%の8名とかなり少数であった。

発表の成果は、学生によってかなりのバラつきがあった。しっかりと練習を重ね、お話の面白さを十分に伝えられる学生もいれば、練習不足や準備不足、また友達の前で発表することの照れからうまく表現できない学生の姿もあった。

2. 絵本の読み聞かせの実施について

絵本の読み聞かせについては実習場面で実施している学生が多く、積極的に活用する姿が見られる。幼稚園実習、保育園実習では93.5%で86人、施設実習では65.2%で60人の学生が実施している。

絵本の読み聞かせは、「乳児保育Ⅱ」の時間に取り入れた。3回にわたって、乳児絵本から幼児絵本について特徴や選び方、読み方を学んだうえ授業で模擬保育をおこなった。グループで読み合いを行った際も新しく出会う絵本に興味を示し「かわいい話」「これ実習で使いたい」など積極的な言葉が聞かれた。

実習での実施の多さは授業での経験以上に実習先にある絵本の豊富さ、すぐに手に取って語ることができる手軽さ、また設定保育の間の隙間時間や、活動の終了時の待っている時間、つまり保育者が次の活動のために環境設定をしている時に活用されることの多さからであると考えられる。実習中に子どもが気に入っている絵本を担当である保育者が読み、実習生も同じ絵本をリクエストされ読んだ、という経験もあった。

3. わらべうたの実施について

わらべうたの授業は、学生同士触れ合いながら、また赤ちゃん人形を使用しながら行った。乳児の顔や体、指に触れながら歌うわらべうた、膝にのせてゆれるわらべうた、輪になり動きのあるもの、セリフを伴う鬼ごっこわらべうた、子守歌、数え歌、わるぐち歌などを紹介しながら実践した。わらべうたを実施した学生は、幼稚園実習で14.1%の13人、保育園実習で46.7%の43人、施設実習で29.3%の27人であった。

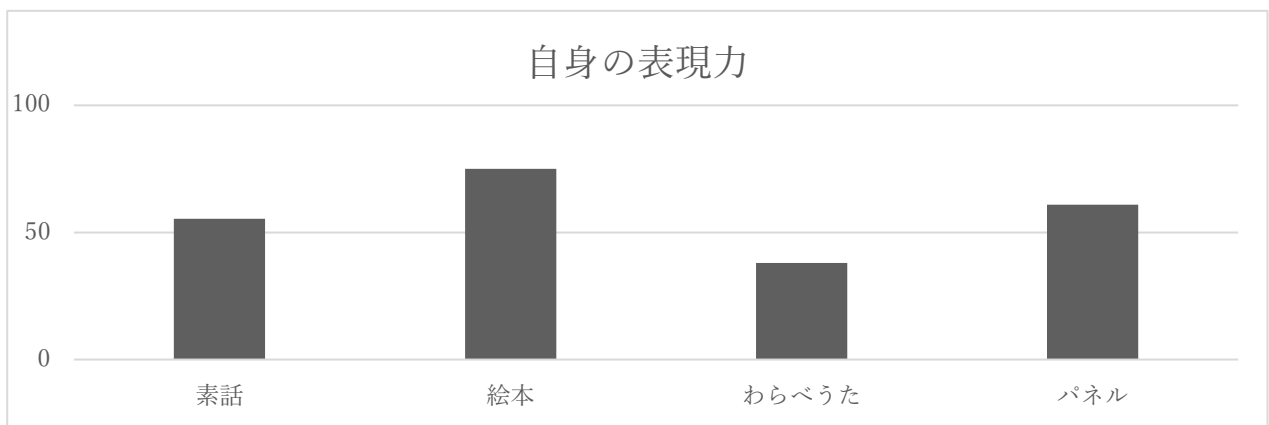
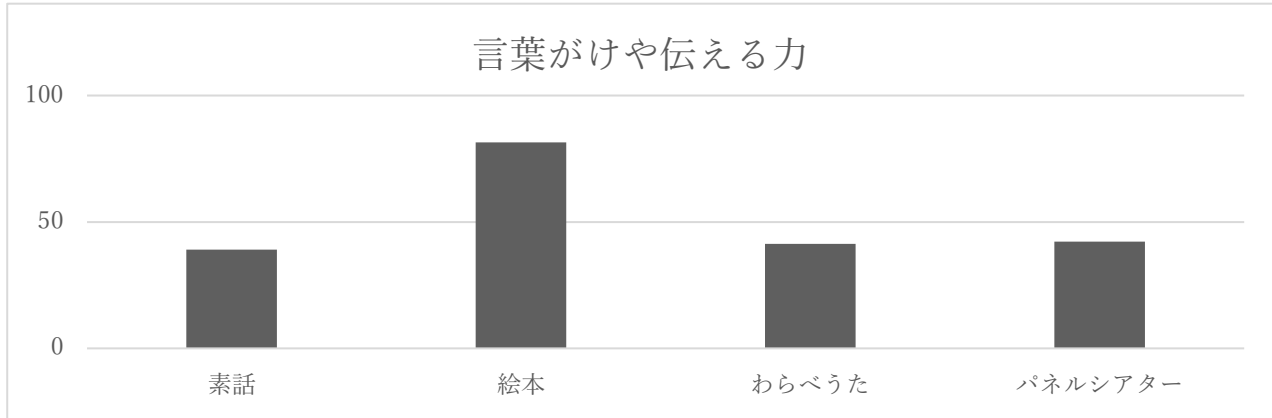
4、パネルシアターの発表・実施について

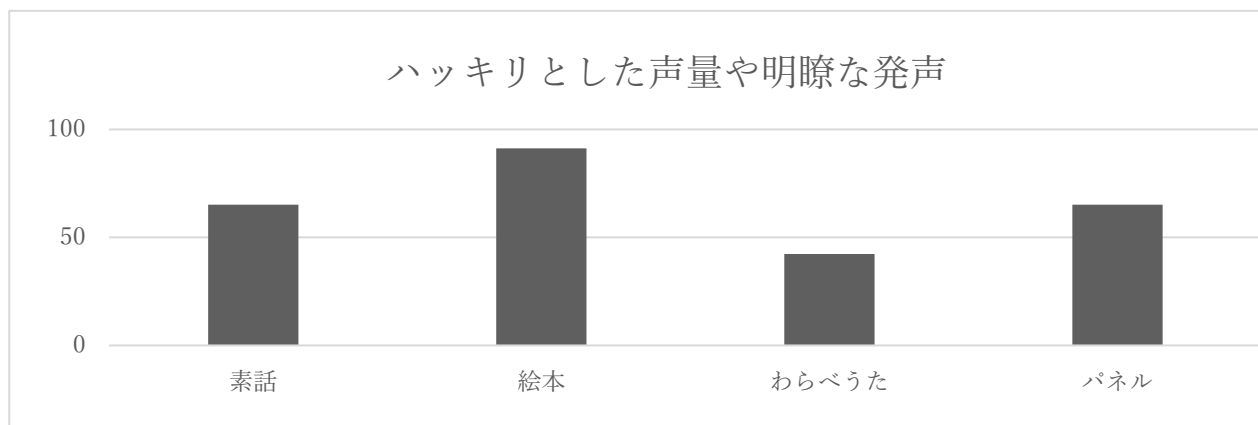
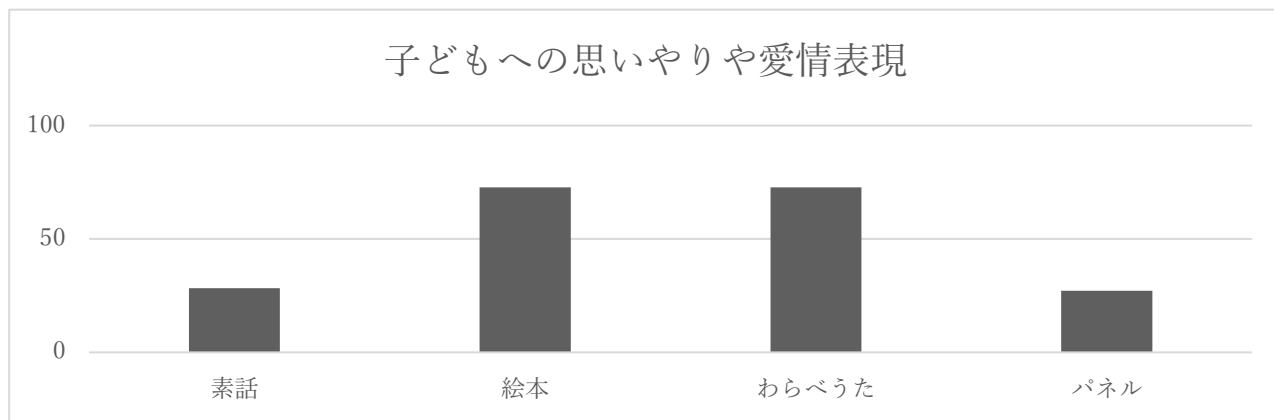
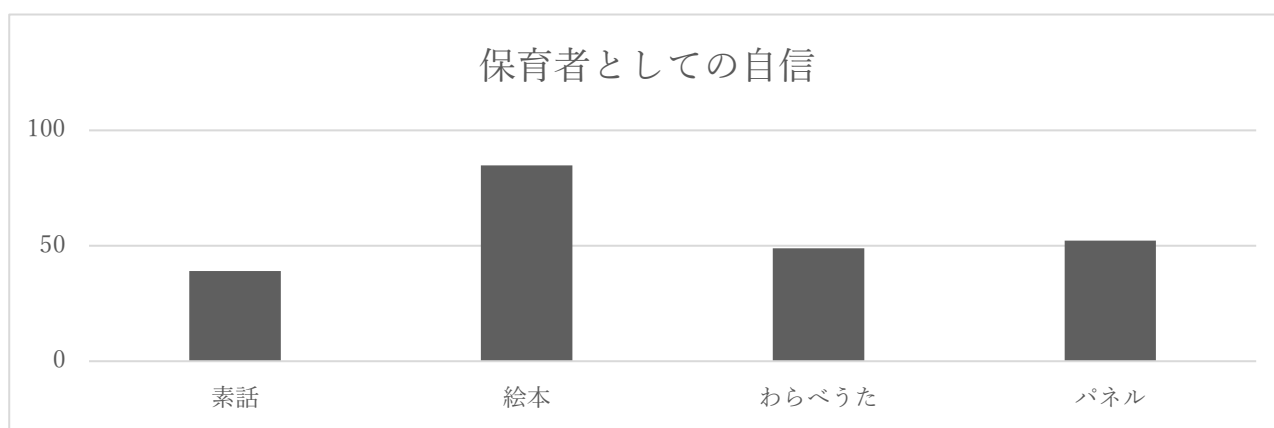
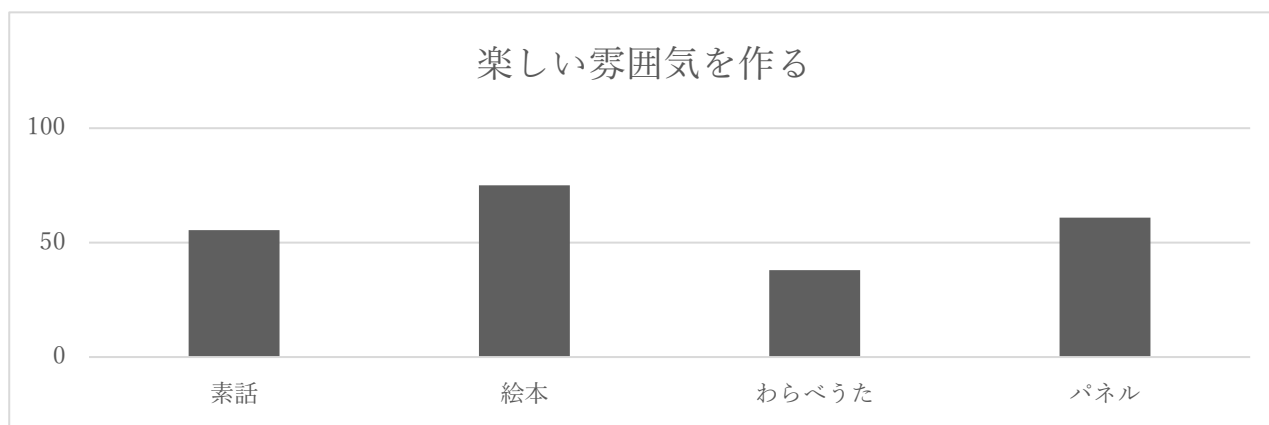
初回オリエンテーションでは、「とんぼのめがね」「にじ」「はらぺこあおむし」「たこやき」の作品を紹介した。また学生は模擬保育の準備として自分の作る作品の動画を YouTube で探し、動かし方を学ぶという方法も取っていた。パネルシアターについて実際に実習で行った学生は、幼稚園実習 21.7%で 20 人、保育実習 19.6%で 18 人、施設実習 5.4%で 5 人であった。幼稚園実習は 6 月であったため、作品づくりを急ぐ学生の姿が見られた。ほとんどの授業時間を作品づくりに割き、2 作品、3 作品と制作はしたものの実習で実際に行った学生は少なかった。

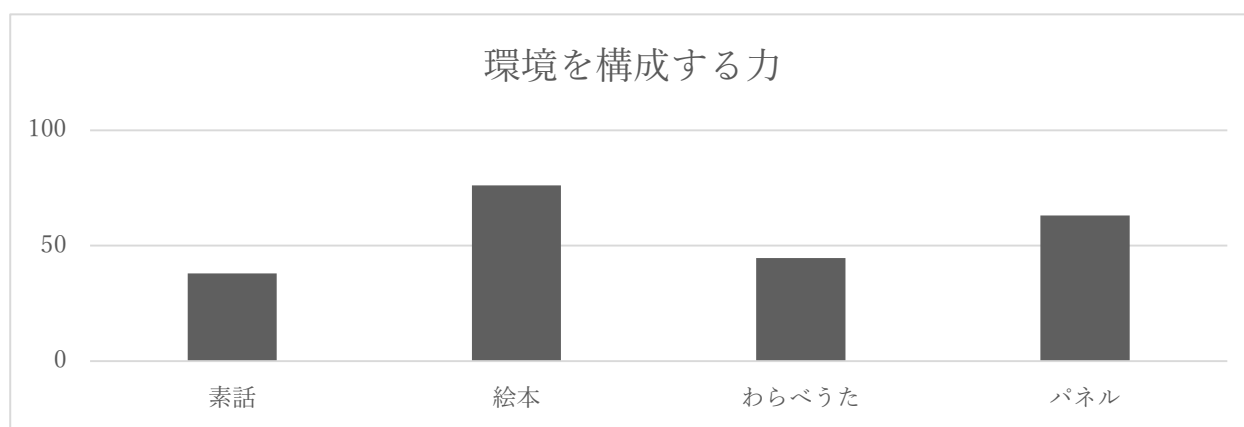
②次に、これらの演習がどのように保育者の専門性として役にたつと感じているのか、なお、保育者の専門性については 2014 日本保育学会第 67 回発表（谷口ナオミ/松下京）「保育専攻学生が考える保育者の専門性について」のアンケートより、抽出した内容を以下のように分類し設問に使用した。学生が保育実習で感じる保育者の専門性については「言葉掛けや伝える力」「自身の表現力」「楽しい雰囲気を作る」「保育者としての自信」「子どもへの思いやりや愛情表現」「ハッキリとした声量や明瞭な発声」「環境を構成する力」であった。設問は以下のとおりである。

これまでの演習授業で行った素話、絵本の読み聞かせ、パネルシアター、わらべうたの内容を実践するにあたり、どのような専門性が身についた、あるいは深まったと思いますか。適している箇所に✓を入れてください。（※複数回答）

保育者としてどのような専門性が身についた、あるいは深まったか







V. 総合考察

1. 素話の実践について

面談や学生からの報告により明らかになったのは素話を実習先で実施できたのは、模擬保育の発表の場でもしっかりと自分の体に染みつくまで練習を重ね表現できた学生であった。模擬保育では一人一人に感想カードを記入することを課題にしていた。友達からの感想カードのメッセージや発表後に称賛の拍手があるなど、聞く側の学生からも評価されたことが、より自信につながり実践の場でも挑戦してみたい、是非子どもたちにも聞いてもらいたい、という自信につながっていることが伺える。

施設実習終了後の面談では、「寝る前に素話をする」と毎日『もう一回やって』とリクエストがあり同じ話を繰り返し楽しんでくれる子どもの姿がめちゃ嬉しかった。なんかお話でつながっているっていう感じ。私と子どもだけじゃなくて、子ども同士も一緒に楽しんでるっていうか・・・もっとレパートリーをふやして、もっと覚えたいって思った」という報告を受けた。また個別の部屋で過ごす時間が多いため、施設職員の目が届かない時間が多いことから、「先生たちに見られてない、聞かれていないっていう安心感があって、緊張なく行えた」という意見もあった。実習中の学生は、常に保育者の目線を気にかけていることが見て取れる。

また、実践できなかった理由として「実習で自分が（素話を）やるところを想像できへんかった。」と答えた学生もあった。彼は自分の得意分野である、身体を使った遊びや、工作を部分実習で実践したことを報告した。また「今回の実習ではできなかったけど、なんでできなかったか」というと、言い訳やけど、練習が足りてない、自信が持てなかった。でも実際に自分のクラスを持ったらいつか絶対に聞いてもらいたいって思っている。その時はもう、ちゃんと練習して・・・」とこの経験をいつかは実践してみたいと思っている学生がいることも分かった。また、この課題が出た段階で「もう自分には絶対に無理。正直なんとかやって単位取らな、まじでやばいと思っていた」と話す学生もあった。人前で実践することの苦手意識が強い学生もあり、演習課題が重く、模擬保育が単なる単位修得の課程となっていない場合もありうる。物語を聞く楽しい経験を通して、自らもやってみたい、と思える授業展開ができていなかったことが反省である。

また実習で素話を実践できなかった学生の中には、覚えたお話が長編のもので、5歳児にふさわしいと考えていたが、配属クラスが幼稚園では3歳児クラス、保育実習では2歳児クラスとお話の内容が与える子どもの年齢に適していない、という判断もあった。簡単に短いお話などもっとバリエーションを持っていなければ対応が難しいと感じている姿もあった。

物語を選ぶ段階で学生は、なるべく短いもの、または自分が知っている昔ばなしを選択すれば覚えや

すいと感じている学生の姿があった。素話に対して、物語を暗記すること、覚えこむまで何度も練習をすること、といったハードルの高さを感じている様子であった。また、物語の選択に、安易にネットから選択するという学生の姿もあった。筆者の指導はオリエンテーション時に『エパミナンドス』『ふたりのあさごはん』の素話を行ったうえで「おはなしのろうそく」や素話にふさわしい本から選ぶこと、という指示を出していた。また学内図書司書にも協力を頂き、素話の本のコーナーも準備いただいた。しかし複数の学生はネット検索から、昔話の簡略化されたものを選んでいった。情報収集にネットを使用すること、簡略化されたものを選択することに抵抗のない学生の姿に気づかず注意喚起を怠った点は反省が残る。

2. 絵本の読み聞かせの実践について

絵本は比較的、学生が身近に感じられ自宅でも簡単に読む練習ができるなど実習準備から取り組みやすい媒体と考えられる。子どもと物語を一緒に楽しむことも一つであるが、制作や遊び等、保育の導入に用いられることもあるため、指導案を作成するときにも事前にイメージをもって準備がしやすい点も挙げられる。

学生にとっては比較的、取り組みやすいものであると思われる反面、年長クラスで「これ読んで」とリクエストされた絵本が大変な長編で下読みも行っていないため「保育者は絵本の内容を知っている必要があって、詰まり詰まり読むでは子どもの集中力が切れるっていうか、子どもはグタグタ〜となってしまっ…おはなしのおもしろさも伝わらない。ちゃんと絵本の長さとか、話の面白さをこっちが分かってないとダメ」という反省も聞かれた。保育には準備が大切であることを学生自身の体験で省察、反省できた事例であった。

また、学生が幼いころから気に入っている『ふしぎなナイフ』の絵本を、子どもたちに読み聞かせたところ「昨日の絵本読んで」と毎日リクエストがきて、クラスのお気に入りの一冊となったエピソードもあった。自分が好きだったものが今の子どもたちに受け入れられた嬉しさを感じている様子であった。

3. わらべうたの実践について

保育園での実施の多さは、実際に保育園でもわらべうたを取り入れている園が多かった、ということが結果から読み取れる。乳児保育の部屋では各々に乳児を抱きわらべうたがどこかから聞こえてくる、という環境であったと日誌の記述にもあった。また4歳児クラスでは「くまさんくさまん」を輪になって繰り返し共通の楽しさを感じられる遊びを展開している場面もあった。聞き取りでは「もともと保育園でも活発で。普通にわらべうたが取り入れられていて、あーぶくだったで鬼ごっこが始まったり、かもめかもめを担任と複数の子どもたちで遊んでいる日もあった。そしたら他の子たちもよってきて…って感じで」「乳児クラスでは先生が赤ちゃん抱っこしているときハミングで子守歌とか、わらべうたみたいな歌を歌ったり、何気ない時間にちょこちょこ遊びをしていたから……、私も習ったやつをやった。……自由遊びの時。私から遊ぼうって誘って。一本橋ちょこちょと、ここはと一ちゃんにんどころと。私が歌っている間、ずっと指を見て、目が合っ…ての繰り返しで、もうほんまに食べたろかって思うくらいかわいかった。あと、あれ、首が座っておっちゃんもできる子と、うまはとしとし……そしてら、ぼくも〜って結局4人座られて。重いし。……愛しい気持ちがわーってなった。」と報告があった。

幼稚園では、「はないちもんめ」や「ああぶくだった」を行っている園があり一緒に子どもたちと交流でき距離が縮まったと感じた学生もあった。

「施設では（児童養護施設）結構学年もいろいろな感じ。それで何してあそぶ？ってなった時、あーぶくだったしうって誘って。・・・うん、楽しかった。自然に手つないだりするから一気に距離が縮まったって感じ。」との報告があった。施設では一緒に過ごす時間が長い分、遊びのバリエーションを知っていることが大切だという感想やメロディーがあるわらべうたは、場を和ませたり、盛り上げたりしてくれるという意見もあった。お風呂の時間にわらべうたのかぞえ歌をうたいながらしっかりお湯に浸かることを促せた報告もあり、生活の中で楽しい時間を増やすことに寄与できたことを実感した様子であった。

一方、聞き取りで実施できなかった理由について乳児クラスの個人とのかかわりの中で自然と行うのは難しいと感じている場面もあった。「いきなり保育室でわらべうた歌うのって。いや、無理だった。」と、複数人いる保育士の中で実習生として入った保育室でわらべうたを歌うことに気恥ずかしさを感じ、躊躇する姿もあった。

1 園ではあるが「保育園の先生たちがわらべうたを全く推奨している雰囲気ではなかった。何故わらべうたなの？と逆に聞かれた」と回答する学生もあった。地域によって、園によつての違いも感じられた。

4、パネルシアターの実施について

実際に実習でパネルシアターを実施できた学生は、オリエンテーションの時点でパネルが園にあるかということを確認している。また、学校で作った作品があるのでやってみたいという積極的な提案が自らできている。一方実施できなかった学生は、「パネルがあるのかどうかわからなかった」とパネルの所在を確認さえできずにいた者が多かった。面談の中の会話から、何故確認できなかったのか、というところまで掘り下げて聞くと、自分の作ったパネルシアターを実際に子どもたちの前でやりたい、という意思がなかったことや、納得できる作品ではなかったこと、子どもたちの前で発表するほどきちんと練習できていなかった、という気持ちがあったことが考察される。

パネルを動かしながら子どもの顔を見てお話や歌を展開するパネルシアターであるが、相当練習をしなければ子どもたちの前では実施できないというハードルがあったように感じられる。授業の展開として、模擬保育の発表後に一人一人にアドバイスは行ったものの、その後練習をする場もなく実習を迎えた学生がほとんどであった。作品を作る段階から、子どもたちの前でお話を語る自分をイメージし、自信をもって行えるような指導の時間を持つべきであったと反省が残る。また、実習に貸し出しできるパネルボードの必要性を感じた。

授業で身に着ける演習技術も、実習場面では行事の関係等もあり、実施する機会がなかった、ということもある。また消極的な学生は自信を持つ経験にまで至っておらず実践に移せないケースがあることも分かった。

今回の調査では、演習科目で行った実践を実習で行ったか、行わなかったか、なぜ行わなかったのか、という質問から見えてきたものであるが、実際には自信が持てず行えなかった学生にとっても「いつかは子どもたちの前で語ってみたい」、「就職したらちゃんと練習して子どもに見てもらいたい」という思いがあることからそれぞれの体験になっていることは明らかになった。就職先によって先輩保育者の影響を受けて、スキルの向上を目指すこともあれば、必要にかられて再度挑戦をすることもあると考えられる。お話を伝達する技術の習得や、わらべうたを介して子どもと触れ合う体験をしたことが、今後の保育者として経験を積む中で、再び生きていくようにと思う。

-
- i 保育所保育指針解説 2018 年 3 月 厚生労働省編
 - ii 伊勢明子、吉村真理子 「保育者にとっての絵本体験の重要性」 千葉敬愛短期大学紀要第 39 号 (3) 2017 年 3 月 P449 ～ 455
 - iii 長谷川比呂美 (2007) 保育実習に関する学生の意識調査について：実習不安を中心として、
淑徳短期大学研究紀要 (46), 81 - 96,
 - iv 谷口ナオミ、松下京「保育専攻学生が考える保育者の専門性について 2」(2014 日本保育学会第 67 回発表/日本保育学会第 67 回大会発表要旨集 P514